

オランダにおける資料管理等に関する研究動向調査報告

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: National Museum of Ethnolog 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 末森, 薫 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00009505 |

オランダにおける資料管理等に関する研究動向調査報告

文・写真 末森 薫

2018年11月11日から17日にかけて、国立民族学博物館の研究動向調査事業の一環として、オーストリアおよびオランダを訪問する機会を得た。オーストリアでは国際学会に参加し、文化遺産や博物館分野における先端技術の開発や応用について、最新の研究動向を調査した。また、オランダでは文化遺産局（Cultural Heritage Agency of the Netherlands）と民族学博物館（Museum Volkenkunde。以下、オランダ民博）を訪問し、オランダが進める国際文化政策および博物館資料管理の動向について情報を得た。ここでは、オランダにおける資料管理活動の動向を中心に、それぞれについて簡潔に報告したい。

先端技術をテーマとする国際学会への参加

CHNT（Cultural Heritage and New Technologies）は文化遺産や博物館分野における先端的な技術をテーマとして、オーストリアのウィーンで毎年開催されている国際学会である。2018年に開催された第23回大会は、EGGCH（EUROGRAPHICS Workshop on Graphics and Cultural Heritage）と共同で開催され、ヨーロッパ諸国を中心として、500名を超える参加者があった。口頭・ポスターをあわせて200本を超える発表があり、その内容は2D、3Dのデジタル技術等を用いた文化遺産の可視化、ARやVRといった仮想現実の文化遺産への応用、博物館等におけるマルチメディアやモバイルアプリケーションの運用等多岐にわたっていた。今大会から新たに加わったセッションに、3Dデータを活用して構造物の施工管理をおこなうBuilding Information Modeling（BIM）を文化遺産に適応するHeritage-BIMがあり、その定義や方法について議



CHNT 第23回大会の開会式（2018年11月、オーストリア・ウィーン）。

論がおこなわれた。

オランダ・文化遺産局が実施する国際文化政策

オランダ・文部科学省の下部組織である文化遺産局は2009年より、オランダ国立公文書館（National Archive of the Netherlands）とオランダ国際文化協力センター（DutchCulture）と連携し、オランダの外務省および文科省が所管する国際的な文化政策として「共有文化遺産プログラム（Shared Cultural Heritage Program）」を実施している。文化遺産局に所属するコーディネーター4名は、国内外の専門家と連携しながら、水中考古学、建造物の環境、博物館・博物館資料の3つを柱とする約30の事業を展開中である。対象国はオランダと歴史的に関係の深い、アメリカ、インド、インドネシア、オーストラリア、スリナム、スリランカ、日本、ブラジル、南アフリカ、ロシアの10か国である。事業ごとに形態は異なり、おもには研修・ワークショップ、マニュアル等のツール制作、共同研究といった活動がおこなわれている。日本では長崎県の平戸において、博物館等の文化資源を地域振興へ活用する事業が進められている。

オランダにおける資料管理活動の動向

オランダ・ライデン市にあるオランダ民博は1813年に開館し、もともと大学病院として使用されていた現在の建物へ1937年に移転した。日本関連の資料を含め、植民地時代に世界各地から収集した資料等からなる収蔵品数は450,000点を数え、館内の他、約30キロメートル離れたス・グラヴェンザンデ（'s-Gravenzande）の施設に収蔵されている。資料管理には、保存修復専門員（conservator）、資料取扱担当員（art handler）、資料登録担当員（registrar）、貸借資料登録担当員（loan registrar）が常勤職員として携わり、場合に応じてフリーランスの保存修復専門員が加わる。

館内の収蔵室は集密棚と固定棚を併用したつくりであり、中央に熟覧用のスペースが設けられている。収蔵方法は、資料の種類やサイズによって異なり、中型の立体資料は和紙を敷いて棚に置くか、発泡体や段ボールでつくられた台にのせて棚に置かれている。小型の立体資料や平面資料は引き出し式の棚におさめられ、平面資料の中には紙管に丸めて収納されているものもある。大型の立体資料や長尺資料には専用のケースを作成する等個別の対応がなされていた。資料の管理

末森 薫 (すえもり かおる)

国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員。専門は保存科学、仏教美術史、文化遺産学。主な編著書に、『敦煌莫高窟と千仏図』（法蔵館 2019年）、『国際的な文化遺産の保存・活用に関する総合的研究』（関西大学国際文化財・文化研究センター 2018年）等がある。

には1990年代からバーコードシステムが導入されており、棚および資料それぞれにバーコードが付されている。資料に関連する記録は、バーコードを読み取ることでデータベースに格納される。

博物館の統合による資料管理体制の変化

2014年、アムステルダムにあるトロップン博物館 (Tropenmuseum)、ベルグ・エン・ダルにあるアフリカ博物館 (Africa Museum)、そしてオランダ民博の3館が統合し、国立世界文化博物館 (National Museum of World Cultures) が誕生した。2017年にはロッテルダムのワールドミュージアム (Wereldmuseum) が加わり、現在は4館で構成される。国立世界文化博物館には4館が共有する物質文化研究所 (Research Center for Material Culture) が併設され、共通した理念やミッションのもとに、展示や研究活動が進められている。

統合による資料の共有化により、資料管理にもいくつかの変化があらわれた。統合前に各館で用いていた資料番号は、統合により重複が生じることとなり、各館のアルファベットを先頭に付けるかたちで新たな資料番号が付与された。たとえば、オランダ民博の資料にはオランダ語の Rijksmuseum Volkenkunde の頭文字「RV」が付け加えられた。データベースも各館で異なるシステムを運用していたが、オランダ民博で用いていたシステムへの統合が進められている (2018年11月時点で、残り1館が未統合)。データベースに紐付ける文書の書式等も統一され、タブレット端末を用いて遠隔地でも共有することのできる電子版のコンディションチェックシートも導入された。また、各館の資料が共有化されたことにより、資料の貸し借りにかかる手続きが簡略化され、各館を行き来する資料が増加した。移動の際は、行き先を記したシールの貼られたコンテナやフレーム、資料にあわせてつくられた収納箱に梱包・収納され、月1回のペースで4つの館を回る輸送車で運ばれている。

共有型収蔵施設の建設

国立世界文化博物館の傘下にある4館は、現在は各館で収蔵施設を所有しているが、将来的には4館が共同で利用する収蔵施設を建設することが構想されている。オランダでは近年、新たな収蔵施設を建設する複数の事業が進められている。



オランダ民博の外観 (2018年11月、オランダ・ライデン)。



資料移送に使用されるコンテナ (2018年11月、オランダ・ライデン)。

2016年にオランダ北部のフリースランド州に開館したフリースランドコレクションセンター (Kolleksjesintrum Fryslân) は州内にある5つの館の資料をおさめる共有型の収蔵施設である。この収蔵施設を建設するにあたっては、デンマークのヴァイレ文化遺産センター (Conservation Center Vejle) の建物がモデルとされた。同センターは、持続可能であることを目標にかかげ、2001年に16の文化施設が共有する収蔵施設として建設された。周辺的环境からの影響を遮断するために、壁・天井に絶縁層が設けられたコンクリート造りの建物であり、床面からの地熱を利用した受動的な温度制御を基本として、徹底的な低エネルギー化・低コスト化を実現した (Knudsen and Rasmussen 2005 ; Knudsen and Lundbye 2017)。フリースランドコレクションセンターの建物は、ヴァイレ文化遺産センターの収蔵施設と同様の基本構造を有し、さらに屋根に太陽光パネルを設置し、外壁を覆うように植物を這わせ外環境からの影響を制御する独自の工夫も採り入れられた。また、2層式の集密棚を導入し、体積比65パーセント減の省スペース化を実現した。

オランダでは、本稿で紹介したオランダ民博やフリースランドコレクションセンター以外にも、博物館の統合や収蔵施設の共有化の事業が進められている。その背景には、合理化による低コスト化や持続可能性を担保するための低エネルギー化等、社会からの要求に応じるところも大きい。一方で、資料を1か所に集めることによる災害等へのリスクアセスメント等、新たな課題も生まれている。

参考文献

- Knudsen, L. R. and M. H. Rasmussen 2005 Building a New Shared Storage Facility for 16 Museums and Archives, In I. Verger (ed.) *ICOM-CC 14th Triennial Meeting The Hague 12-16 September 2005*, pp. 648-654. London: James & James.
- Knudsen, L. R. and S. R. Lundbye 2017 Performance of Danish Low-energy Museum Storage Buildings. In J. Bridgland (ed.) *ICOM-CC 18th Triennial Conference Preprints, Copenhagen, 4-8 September 2017*. London: James & James.